

一生愛された蟹と蝦

—小田原利光先生を偲んで—

大森 信
阿嘉島臨海研究所
所長

Tribute to the memory of Dr. Toshimitsu Odawara

M. Omori

目の前に沖縄の壺屋で焼かれた腰高のビールジョッキがある。小田原利光先生にいただいたものだ。テナガエビとシオマネキが茶と紺で描かれ、底に昇の銘が入っている。どこにでもあるような素朴な作品だが、使いよくて親しみがある。人間国宝といわれる金城次郎氏の陶作について、あるとき小田原先生が、「むかし、懸命に生きていたころの金城の作はよかったが、有名になったら駄目になった」といわれた。値段のすごい金城氏の作品にいまひとつ民芸の持つ謙虚さと温かみを感じなかった私は、先生の鋭い指摘を素直に受け入れることができた。

その小田原先生が、2004年10月17日にお亡くなりになった。病に臥される直前まで、お住まいのある麻布十番で診療を続けておられたと聞く。先生は、本職は医師でありながら、蟹と蝦の研究者として海外までよく知られ、長年にわたって日本の十脚甲殻類の研究を支援してこられた。また、私どもの熱帯海洋生態研究振興財団の評議員としても長く研究活動を見守ってくださった。心からの感謝とともに先生を偲んでみたい。

小田原利光先生は1919年生まれ、麻布中学から東京慈恵会医科大学に進まれたが、そのときサクラエビの研究で知られる中沢毅一先生の生物学を受講されて、甲殻類、特に蟹への興味をかきたてられたそうだ。私は中沢先生の生涯について「さくらえび—漁業百年史」（静岡新聞社、1995）に書いたことがあるが、その折には小田原先生から、生き生きとした思い出を語っていただいた。

先生は医師の傍ら、著名な甲殻類の研究者たちと交流され、その人たちとあちこちに蟹類の採集に出かけられた。特に与論島や沖縄本島、先島諸島がお好きだったようである。小田原病院の一角に、先生が1961年2月に「私立小田原甲殻類博物館」を設立されたことはよく知られている。先生はそこに1937年以来収集された甲殻類の標本約15500点のほか、蟹や蝦が図柄になった陶磁器や玩具から郵便切手やマッチ箱まで、あらゆるものを保管・展示され、訪れるひとたちを楽しませてくださった。その標本類は1994年、小田原市にある神奈川県立博物館に寄贈され、「小田原コレクション」として収納されている。その中には先生の還暦を祝して献名されたオダワラフサイバラガニ *Lopholithodes odawarai* Sakaiのタイプ標本も含まれている。

先生は阿嘉島にも二度来られた。最初は1992年11月で、甲殻類研究の大家の故三宅貞祥先生（九州大学名誉教授）と阿嘉島の小さな河口に仕掛けたトラップでモクズガニなどを捕まえて、とても嬉しそうだった。二度目は2001年5月、奥様とご一緒に研究所に滞在されて、私と保坂理事長が同行した。晩年、のどを傷められたために声がかすれたが、いつも首からお好きなカメラをぶら下げて島のあちこちを歩かれた。慶留間島の文化財「高良家」の縁側に腰掛けて、若い頃の話をつかかったことが懐かしい。もう一度阿嘉島に行きたいとたびたび言っておられたが、ついに実現しなかった。

